前例を超えた世田谷区の認知症条例

「世田谷区認知症とともに生きる希望条例」は、私たちのこれからの生き方・ともに暮らす地域への道しるべです。認知症を体験した委員とともに制定し、その思いを大切に、条例名に「やさしさ」ではなく「希望」という文字が入りました。予防より「そなえ」。そのために、ひとりひとり、またはみんなで「希望ファイル」をつくってみることが条文に盛り込まれました。早期発見・早期診断が早期絶望につながってきた過去への反省から、たとえば身近な地域で「アクションチーム」をつくる挑戦が始まろうとしています。「かわいそうな人をサポートしてあげる」のではなく、「パートナー」としてともに生きる。そんな世田谷をつくるために、魅力的なパネリストにご登壇いただきます。

基調講演＆コーディネーター

丹野智文（たんのともふみ）さん

新著『認知症の私から見える社会』は、300人を超える当事者との出会いから生れました。フォルクスワーゲンの東北地区トップセールスマンだった8年前、39歳のときにアルツハイマー型認知症と大学病院で診断されました。絶望した丹野さんが救われたのは認知症の先輩との出会いでした。地元仙台では、「当事者の当事者による当事者のための認知症カレッジ」など幅広く活動しています。社長の方針で、いまもネッツトヨタの社員。基調講演とともにコーディネーターもしてくださいます。

保坂展人（ほさかのぶと）区長

この条例には強い意欲をもって取り組み、毎回の議論にも参加してきました。2011年4月に就任して、3期目。「地域福祉」を重視し、世田谷区独自の28か所のまちづくりセンターに「福祉の相談窓口」を置いて、地域包括ケアを地区で展開。高齢者福祉のもっとも大きな課題として「認知症と共に生きる地域社会づくり」を重視しています。「参加と協働」を掲げた区政展開の中で、認知症当事者や家族、医療・介護関係はもちろん、多くの区民が熱心に語り、力をあわせる地域づくりを大切にしています。

パネリスト

長谷部泰司（はせべやすじ）さん

スーパーマーケット関連会社の社長でした。認知症の症状が表れたのは退職した後の73歳の頃。ひとり暮らしのマンションはモノが片付かなくなり、次女が暮らす世田谷区へ。「どうなってもいいんだ」といらだち、周りに怒りをぶつける日々。ところが、条例検討委員となり発言が尊重されるとともに、自信をとりもどしました。条例スタートの記念シンポジウムでは「条例は大きな希望になるのではないでしょうか。老人を代表してお礼を申し上げます」と感謝の言葉を。

貫田直義（ぬきたただよし）さん

テレビ東京の名プロデューサー。時代を先取りした連続企画『少子長命時代』は、全国62カ所をロケ。歌手のアグネス・チャンなど異色のコメンテーターを起用し、看板番組に。テレビ東京アメリカの社長を退職後の70歳のとき、認知症状とともに「ソファーの後ろからゴリラが」など幻視の症状が現れ、レビー小体型認知症と診断されました。“講演デビュー”がきっかけで、次第によみがえり、動画づくりではみずから脚本を書くほどに。

澤田佐紀子（さわださきこ）さん

30年以上、講師として小中高・特別支援学級で美術を教えていましたが、60歳を過ぎてから、複数の学校や生徒を同時に把握したり、成績を付けたりすることが難しくなり、母親や祖母と同じアルツハイマー型認知症であると自覚。条例検討委員会では「"サポーター"だと頼ってしまう。"パートナー"だと自分も努力しようという気持ちが湧いてくる。だから"サポーターでなく、パートナー"に」と条例を方向づけました。佐紀子さん制作の「願いの葉」を貼りつけていく「希望の樹」は、認知症在宅生活サポートセンターを訪れる人たちに絶賛されています。

プロジェクト推進チーム世話人

- 中澤まゆみさん（情報発信担当・福祉ジャーナリスト）
- 長谷川幹さん（地域づくり担当・せたがや福祉区民学会会長）
- 遠矢純一郎さん（本人発信担当・認知症在宅生活サポートセンターを運営する在宅医）
- 西田淳志さん（希望ファイル担当・世界の認知症政策に堪能）
- 永田久美子さん（企画担当・日本各地の認知症施策の応援役）
- 大熊由紀子さん（まとめ担当・志の縁結び係&小間使い）

会場マップ

交通アクセス

京王線・東急世田谷線 下高井戸駅 下車 徒歩8分
（新宿・渋谷から10～12分）
京王線 桜上水駅（急行停車駅） 下車 徒歩8～10分
（新宿・渋谷から10～12分）